



特集

常勤医復活まもなく1年

— 国民健康保険小泊診療所 —

おとこのし9月末に前所長が退職してから常勤医が不在となっていた小泊診療所。現所長の山田悦輝医師が赴任し、常勤医が復活してからまもなく1年を迎えます。そこで今回小泊診療所の現在の様子を紹介します。

国民健康保険小泊診療所の歴史は、小泊村閉村記念誌に掲載されている小泊村年表によると、昭和24年に開設。28年に字浜野48・2に新築。47年には診療所下前分所を開設。その後平成9年に字浜野から現在の字朝間へ新築移転しました。新しい診療所は在宅介護支援センターを併設する形で、入院病床19床を有し、平日の午前と午後には内科・小児科・皮膚科と歯科の診療が行われていました。

おとこのし平成16年にそれまで10年間勤めていた前所長が9月末で退任。後任が見つからなかったため常勤医が不在となり、10月から昨年の3月までは内湯診療所の野上先生と武田診療所の市村先生による半日診療となっていました。

しかし昨年4月1日、山田悦輝先生が所長として赴任され、常勤医が復活しました。

山田所長は田子町で生まれ、弘前大学医学部を卒業。約30年間静岡県内の病院に勤務していました。1年間の大畑病院勤務を経て小泊診療所長となりました。

以来現在まで、入院病床は廃止のままとなっていますが、従来通り平日の午前と午後に診療

が行われています。1日に80人〜100人、多い時は140人ほどの患者さんが受診に訪れているそうです。また、1週間か2週間に1度は4、5軒を回って往診もしているということです。

山田所長にインタビュー



山田悦輝所長

— 小泊の印象は？ —

自然に恵まれている。働く場が少ないので都会に出ていく若い人達が多いように思う。

— 小泊の人々の健康意識について？ —

若い人からお年寄りまで、事に気をつけたり、健康食品などを利用するなど自分なりに考えて健康に気を使っていると思う。

— 赴任してからの1年を振り返って？ —

一人暮らしや老夫婦だけの世帯が多いので、そのような人達

が安心して暮らせるような医療を提供したい。

— 患者さんの傾向は？ —

高齢者が中心。腰痛やひざ痛の人が多い。冬場はやはり風邪やインフルエンザが多くなる。

— 2年目を迎えるにあたって？ —

来年もここで働けるのはありがたい。マンネリ化することなく、赴任した時の初心に帰って、また最初の頃の気持ちを持ち続けて少しでも地域医療の役に立てばいい。

また小泊を含めて中泊町は高齢者が多いので、今後は往診などの在宅医療が重要になってくるので、そちらにも力を入れていきたい。

小泊診療所に来てからは読書の時間が増えたと話す山田所長。診察時間が終わっても、急患に備えて夜8時頃まで待機しているということだ。

医師不足が叫ばれている今日、小泊地域の医療は山田所長をはじめとする小泊診療所が大きな役割を果たしています。